

日英逐次通訳の分析一試論

小松 達也

(明海大学)

For Japanese interpreters, interpreting into English (or any other European language) poses particular challenge. This is because, for most of them, English is the second language which they have acquired through conscious learning. This study aims at exploring and analyzing problems brought about by this challenge and tries to identify strategies to overcome these problems in order to obtain acceptable and reliable target language (TL) production. Transcribed TL text data of 35 interpreters interpreting four speeches in Japanese into English consecutively were first evaluated, and the results were analyzed and compared using quantitative and qualitative parameters. Quantitative parameters failed to show significant correlation with the results of the evaluation. Then lexical and syntactic selections by the subjects were analyzed. Many inappropriate selections were found, which seem to reflect the language problems. Considerable variety was also observed in the selection of lexical items, particularly verbs to correspond to particular Japanese expressions. Syntactic differences between Japanese and English posed considerable difficulties in the production of English sentences.

This paper reflects the interpreting culture prevailing in Japan and probably in many other countries in Asia where problems related to linguistic development are just as relevant as the problems concerning interpreting skills.

I. 目的

多くの日本人通訳者にとって、日本語から他の言語への通訳は大きなチャレンジである。これは、通訳者の多くにとって日本語が母国語（L1, AIIC [国際会議通訳者協会] の分類では "A" Language）であり、他の言語は学習を通して身につけなければならない外国語（L2, AIIC の分類では "B" あるいは "C" Language）であるからである。

KOMATSU Tatsuya, "Analysis of Interpreting into the Second Language."

Interpretation Studies, No. 1, December 2001, pages 64-84.

(c) 2001 by the Japan Association for Interpretation Studies

伝統的に欧米においては、同時通訳では原則的に A Language にのみ通訳すべきとされてきた (Seleskovitch, 1978: 64-65; Seleskovitch and Lederer, 1989: 112-114)。AIIC によれば B Language は「母国語以外で通訳者が表現・理解の両方において “a perfect command” を持つ言語」、C Language は「通訳者が完全に理解できる “passive languages”」(AIIC Directory, 1997) となっていることから、日本人通訳者の多くにとって英語は C Language と言ったほうが正確であろう。しかるに、わが国においては、放送通訳を専門とする人たちを除いて、通訳者は同時通訳でも逐次通訳でも L2 (B あるいは C Language) から L1 (A Language) へと、L1 から L2 への双方に通訳するのが通常である。

表現力において実質的に母国語に劣る L2 に通訳することは、目標言語 (TL) の規則と慣習に従って分かりやすい表現を達成するという点で、L1 への通訳にはない困難を伴う。この研究の目的は、(1) このような L2 への通訳に伴う問題点が、実際の通訳のパフォーマンスにどのような形で現れ、どのように通訳の質に影響を及ぼしているかを調べることである。その上で、(2) L2 への通訳の質を高めるためにはどのような戦略や工夫が可能かについても考察する。

この課題は、筆者を含む日英語間の通訳者にとって重要かつ身近なものであるが、研究対象としては未開拓であり、また通訳者の評価、通訳技術、言語力、養成などいくつかの関連分野にまたがる複雑な問題でもある。この研究では 35 名の通訳者のパフォーマンスから分析データをとり、通訳の質の評価、質を反映すると思われる諸要因との関連性の探求などを試みた。しかし、諸要因の中でも定量的要因は質の評価との間にほとんど関連性を示さなかった。また、語句の選択 (lexical choices)、統語的選択 (syntactic choices) といった TL の質的要因の分析においては、第 2 言語への通訳の特質を示す興味深いいくつかの結果が得られたが、それらを直接通訳の質の評価と関連づけることは適切でないと考えられた。したがって、本研究は第 2 言語への通訳のいくつかの問題点を指摘し、改善への方策を提案してはいるが、全体としては予備的 (exploratory) なものであり、今後続けられるべきこのテーマについての研究の第 1 歩である。本ペーパーを試論とする所以である。

また、この研究では逐次通訳を分析の対象にした。欧米の通訳マーケットと比べて、わが国では逐次通訳が依然として大きなシェアと重要な役割を果たしており、通訳者はまず逐次通訳においてその技術を確立することを要請される。同時通訳の分析・研究については後日を期したい。

II. 分析資料

1. 分析対象者 (subjects)

この研究の対象となったのは、27 名のプロの通訳者と 8 名の通訳訓練生である。日本のプロ通訳者は、慣行的にその能力によって A クラス、B クラス、一般クラスに分

けられている。この研究の対象となった通訳を行った時点で、上記 27 名のプロ通訳者のうち 13 名は A、11 名は B、3 名は一般クラスであった。8 名の訓練生は通訳者養成プログラムの最も高いレベルのクラスの受講者で、うち 3 名は現在ではプロの通訳者として活動している。

2. 起点言語資料（以下 SL 資料）

この研究の SL 資料として、テーマおよびスタイルの違う 4 種類のスピーチを選び、それぞれから約 30～60 秒のセグメントを抜き取って使用した。音声録音のトランスクリプトを Appendix 1 (p. 75) に示した。また、4 つのスピーチはいずれも用意された原稿を読んだものではなく、原稿なしで、あるいは簡単なメモ程度のものに基づいて話されたもので、構文の不規則性、情報の重複など「話し言葉 (spoken language)」としての特色を顕著に示している。

3. TL 資料を生み出した通訳環境

上記 4 種類の SL 音声資料のそれぞれを、5 つあるいは 6 つの 30～60 秒の長さのセグメントに区切り、下記の環境下で分析対象者が逐次通訳した。その中から分析の対象として適切と思われる 1 セグメントを選び、そのトランスクリプトを分析対象とした。

目標言語資料（以下 TL 資料）に含まれるプロの通訳者のパフォーマンスは、上記スピーチ 3 の現場での逐次通訳を除き、上記 1 で述べた通訳者のランク分けの目的で定期的に行われている通訳者の能力テストの折に、各通訳者によって行われたものである。訓練生によるアウトプットは、通訳者養成プログラムの最上級クラスにおける訓練の一環として、LL で行われた SL 資料の逐次通訳アウトプットである。

4. 目標言語資料（TL 資料）の構成

上記 4 種類の SL 資料となった日本語スピーチそれぞれにつき、7 名の通訳者および通訳訓練生による上記 2 に示した環境における通訳パフォーマンスを録音、転書したテキストが分析の対象となった TL 資料である。35 分析対象者のうち 4 名は 2 つのスピーチに参加している。当初は各スピーチにつき 10 名の通訳者／通訳訓練生による TL 資料を評価の対象としたが、後述する評価の結果、それぞれの資料につき最も総合評価の低かった 3 名のデータをその後の分析対象から除いた。これは、I で触れたアウトプットにおける言語上の制約からくる、より顕著な問題点をあらかじめ避けるためである。

III. パフォーマンスの評価

目的のひとつが通訳の質とそれを反映すると考えられる定量的および定性的な要因との関係を調べることにあったので、上記 II. 3 の TL 資料のテキストを下記の方法で評価した。

1. 評価の基準

通訳パフォーマンスの評価についてはいくつかの研究がなされているが(たとえば、Barik, 1971; Gile, 1995, 1999)、その基準や尺度などについてはさまざまな見解があって、評価方法などについてのコンセンサスは得られていない。この研究では、最も理解が得られやすいと思われる次の2つを評価の基準として選んだ。

(a) 忠実性 (Fidelity): 通訳表現におけるSLテキストの情報内容に対する忠実性は、通訳の質の重要な決定要因として一般的に認められている。ここでは原発言者がその発話において伝えようとした主要な意味あるいは論点 (speaker's intended meaning) が、通訳者によっていかに正しく理解され、再表現されているかを尺度とした。

(b) 目標言語の質 (TL Quality): 第2言語への通訳の分析を重要な目的のひとつとするこの研究においては、通訳者の TL テキストが、構文・語句・スタイルなどの点において、いかに英語本来の規則や用法に合致しているかを重要な評価の対象として取り上げた。IV以下の分析においても、忠実性よりも TL の質を評価・分析の基準をしている。

2. 評価者

評価者は、次の3つの分野それぞれにつき2名、計6名の専門家を選び、依頼した。

(a) 通訳者・通訳研究者: 会議通訳者としての経験を持ち、かつ研究者として通訳あるいは言語学の研究・教育にあたっている2名。うちひとり日本人。

(b) 翻訳者: 日本語を英語に翻訳することを職業とし、英語を母国語とする翻訳者。

(c) 英語教育者: 同じく英語を母国語とする英語 (EFL) 教育の専門家。

上で述べたように、この研究では分析対象者のパフォーマンスの音声的側面は評価の対象としなかった。いうまでもなく、通訳は音声によるテキストを音声で処理する作業であり、声の質やプロソディなどの音声的要素が通訳のパフォーマンスの受容あるいは評価において重要な役割を果たすことは事実である。しかし、この研究では評価作業の効率性と経済性から、通訳アウトプットを録音、転書したテキストを分析の対象とした。

3. 評価の結果と考察

評価結果を示す1例として、<Speech 4>につき分析対象者のパフォーマンスの TL テキストを6名の評価者 (A~F) によって評価してもらった結果を Appendix 2 (p. 77) に示す。

4つのスピーチの評価結果は2つの関連性のあるポイントを示した。ひとつは各分析対象者の忠実性のスコアと TL の質のスコアとの間に2, 3の例外を除いてかなりの共通性が見られたことである。このことは、忠実性のより高い通訳結果を示す通訳者は TL の質においてもよりすぐれている可能性が高いことを示すと考えられるが、こ

の知見は現段階では暫定的と見るべきであろう。これを立証するためには、より幅広い事例についてさらに分析を進める必要がある。

もうひとつは、個別評価において6名の評価者による評価の間にしばしば差異 (inter-rater disparity) が見られたことである。このことは、評価者の間に忠実性、TLの質のいずれについてもかなりの解釈の違いがあったことを物語るとともに、通訳パフォーマンスの評価という作業が多くの変因を含んだ複雑な作業であることを示している。

IV. 定量的パラメータによる分析

通訳の質のレベルを反映する定量的パラメータを見つけることができれば、より客観的な評価が可能になる。この目的で、下に示すいくつかのパラメータを選び III の評価結果との関連性を調べてみた。

1. 長さ (時間および語数)

一般的に、逐次通訳においては TL による再表現の長さは SL による発話より短いのが良いとされる (西山 1979)。しかし、この調査においては時間的にも語数でも、評価のランクとの相関性はほとんど見られなかった。

2. Type/token ratio

Type/token ratio は、使用語彙の多様性 (lexical variety) を示すものとして作文や翻訳文のテキストの評価にしばしば用いられ、この数字が高いほど話者あるいは筆者は TL テキストにおいてより豊かな語彙を使用することができると考えられる (Campbell, 1998)。しかしこの研究では、この点でも評価のランクとの相関性はほとんど見られなかった。

3. エラーの数

ここで対象としたエラーは、単・複形の一致などの基本的かつ明らかな文法的誤り、および明らかに不適切な語句の選択などである。省略については、通訳では SL テキストの重複性を除くため TL で意図的にある語句を省くことがある点を考慮して、非常に大切と思われる部分の脱落のみを取り上げた。

この指標については、スピーチ 1 を除いてランク・オーダーとの間にかなりの相関性が見られた (スピーチ 2 では $r = .925$, $p < .01$, スピーチ 3 は $r = .649$, 4 は $r = .703$)。このことは、TL テキストの評価の過程で、エラーの数が比較的大きな要因であったことを示す。

4. 重複 (redundancies) の数

ここで対象とした重複は、TL テキストに見られる語句の面での重複である。重複を

避けることは、表現の明確性 (clarity of expression) の見地からは重要な要素であるが、この分析では、総合評価、TL の質いずれのランクともほとんど相関性は見られなかった。絶対数としては、TL テキストの長さと比較して重複の度合いはかなり高いといえることができる。これは、VI (統語的選択) でも述べるように、ほとんどの分析対象者が SL テキストの語順を踏襲した TL 表現を行っていることが大きな原因と考えられる。

以上、4 つの定量的パラメータによって TL テキストを分析したが、「エラーの数」が 3 つのスピーチで有意以上の相関関係の評価との間に示した以外は、ランクの順位との間にほとんど相関関係が見られなかった。このことは、客観的な要素によって通訳の質を評価することがきわめて困難であることを示している。評価者の「主観的」な判断をより「客観的」にするためにどのような手立てが可能かについてのいっそうの研究が望まれる。

V. 語句の選択 (Lexical Choices)

TL テキストの示す質的要因としては、語句の選択と統語的選択を取り上げた。前者では、SL テキストに含まれている語 (words) あるいは句 (phrases) の中からいくつかの一般的表現、あるいは特に曖昧さを伴う表現を選び、それらが 7 名の分析対象者によってどのように英語に再表現されているかを <Speech 1, 2, 3> につき比較、分析した (Appendix 3: Lexical Choices (p. 78))。この表は III. 3 で述べた分析対象者の評価のランクに従って配列されているが (同順は 5a, 5b など)、各語句の TL 表現との間の関連性を示すものではない。

<Speech 1>

この SL テキストは自然科学者であり、経済・産業にも造詣の深い専門家の発言であるが、「言葉が通用している」、「どうしてつながっている」など口語発言にありがちな明瞭さを欠く表現をいくつか含んでいる。

当然 (出てくる) : いくつかの可能な英語表現のうち、7 名中 5 名が最も直接的な訳語である “natural” を使っているが、これを使うには “it” などの仮主語を立てる必要があり、重複を伴うぎこちない構文になりやすい。“... is bound to happen” のような動詞表現を使ったほうがより簡潔な文にまとまるであろう。

(言葉が) 通用している : この場合の「通用している」は、直訳的には “to be current” あるいは “to be in circulation” という意味だが、4 名が単純に “say” を使っている。この場合の「言葉」は、「日本民族は働きすぎ」という「意見」を指すから、“say” を選ぶのは適切と言えるだろう。

(どうして) つながっている : 話し手の意図する意味としては “be related” ないし “be relevant” であろう。3 名が “I doubt . . . ,” “I wonder if it’s true” という表現を選

んでいるが、上記の「意見」との関連で適切と思われる。SLの表現は明確さを欠くが、分析対象者の多くはその意図を正しく理解していると思われる。

(新産業を) 育てる : 「育てる」に対しては “build,” “create,” “cultivate,” “develop,” “foster,” “generate,” “nurture,” “raise” などいくつかの英語訳があり得るが、このうちの6つ（ただし “raise up” はこの場合不適切）が7名によって使われているのは興味深い。

<Speech 2>

このテキストは4つのSL資料の中で構文的に最も整っており、意味上の曖昧さが少ない。しかし、厳密を要する科学的な内容だけに、通訳者は具体的な細部について注意が必要である。TL資料では「1940年代から70年」、「温度の下降」などの重要な“details”で分析対象者の多くにエラーが見られる。

(知識は) 少ない : 話し手が「知識」という名詞形を使ったために全員が“(knowledge) is less”という表現を選んだ。しかし、センテンス全体を見れば、“we know less”という動詞構文のほうが英語としては自然だろう。

1940年代から70年に至る : 「1940年代」から「70年」という具体的ポイントを全員が正確に捉えていない。科学的なテキストにおける“details”の重要性についての分析対象者の認識の不足を示す例であろう。

温度の下降 : この具体的かつ明確な表現に対して、意味的に誤ったTL表現が4例に見られた。これは、上記の「40年代から70年」のTL表現とともに「重大なエラー」と認識されねばならない。

<Speech 3>

これは非常にカレントな、具体的な政治状況を背景とした「含み」の多い政治的発言である。通訳者は、ジャーナリストを対象としたスピーチであることも考慮して、テキスト面での正確さに加えて「含み (implications)」の面での正確さにも留意しなければならない。

明確な結論 : この場合の「結論」は“政策の結論”であって、“positions on various policies”という意であろう。この点の解釈について分析対象者の間に混乱があるようだ。実際の講演会における逐次通訳である Subject 1 の選択、“clear policies and conclusions”はその意味で妥当だろう。

世に問う (ております) : この慣用句は “to make public,” “to announce” という意味で、訳文で「世に」という字句にこだわる必要はない。TLデータでは7名中4名が “to the world/society/the people” と直訳的な表現を使っている。

森自公政権 : このスピーチが行われたのは、話し手の小沢自由党党首が自自公連立政権を離脱した直後だった。自由党を割ってできた保守党が連立に加わり、「自公保」

連立政権となったわけだが、小沢氏からみれば3党の連立とは認め難かったのだろう。したがって、この「森自公政権」は話し手の積極的な意図を表す表現ということになる。このことを十分理解して正確に訳しているのは7名中1名にすぎない。これも<Speech 2>の「1940年代から70年」と共通するspeech typeの違いによる理解の必要性を示すケースである。

日本語と英語の言語的な違いのひとつは語句表現にある。特に、日本語特有の慣用表現を的確で自然な英語に再表現することは、第2言語の話者にとって大きなチャレンジである。この研究の分析対象の中にも、英語としては不適切、あるいは明らかに誤りと思われる語句表現が多く見られた。第2言語での表現というハンディキャップを克服するために、通訳者は通訳の際にしばしば遭遇する日本語の慣用的な表現に対応する適切な英語表現を身につけるよう日ごろから努力を続けるべきであろう。

もうひとつのポイントは、いわゆる“details”の処理である。主要な論点(main point)と細部(details)を聞き分けることは理解の過程で大切であるが、後者についてもテキストのテーマによって重要なものについては特別の注意を払う必要がある。この点についての問題点が<Speech 2>および<Speech 3>に示されている。

VI. 統語的選択 (Syntactic Choices)

日本語から英語の通訳に伴う困難点の中で、最も議論の対象となるのは日本語独特の構文、なかでも著しい語順の違いの処理である。典型的な“left-branching, SOV”言語である日本語の構文では、主語と述語が大きく離れ、また否定などセンテンスの意味を左右する要素がしばしば文末にくるケースが多く、特に同時通訳では困難の原因となることはよく知られている(福井・浅野 1961; 金山・国弘・西山 1969; 西山 1979)。また、口語では文の切れ目が不明瞭で、センテンスが長くなりがちなもの、構文の処理に困難が伴う原因のひとつである。

科学的なテキストらしく比較的すっきりした構文を持つ<Speech 2>を除く3つのSLテキストから、相対的に複雑な文構造を含むセグメントを選び、対応するTLテキストの構文との比較を試みたのがAppendix 4 (Syntactic Choices, p. 81)である。SLとTLテキストを、 , , ... といくつかのユニットに区切っているが、これはSLとTL間の対照を見やすくするための筆者による便法である。

<Speech 1>

このSLセンテンスのトピックは「空洞化現象」であり、それはまた主文の主語でもある。SLのユニット①は、動詞の連体形の「ありました」で終わっていることから、「空洞化現象」にかかる関係節と解釈されるが、そのようにTLで表現している例はひとつもない。7例ともTLの語順と同じ , , , の順で訳出している。SLのユニット④「簡単に言えば日本の給与水順が高い」は、主文に対する従属節と考え

ることも可能だが、TL ではすべての例が並列的に訳していることにも気づく。概して SL の語順をそのまま踏襲する「直訳」傾向がみられる。

このため、TL 資料例の多くは主語の重複 (3, 5a, 5b)、主語・述語関係の混乱 (2, 5a) などといった構文的問題を生じ、“clarity of expression” を損なう結果となっていることがわかる。

<Speech 3>

この SL テキストは日本語ではひとつのセンテンスであるが、④の終わりで区切ってふたつの部分からなると考えることも可能である。

前半 (①, , , ④) では、③の処理が鍵であろう。英文としては、③ (“unlike the LDP and other political parties”) を文頭 (あるいは①の後) に持ってくるのが自然であろうが、TL 例では 7 例中 4 例 (2, 3, 4, 5; 6a もこれに近い) が①をそのまま文頭に持ってきている。このことが SL テキスト上、構文的な重複と混乱をもたらしていることが上記の 4 つの例で見られる。「あらゆる政策について」(②) の取り扱いについても、この句は④の「明確な結論」に直接繋がると見るのが意味上自然と思われるが、同じく 4 例が SL と同じ②の位置を TL でも維持しようとしている。

SL 語順の踏襲が TL テキストで構文的な重複や混乱をもたらしている例を挙げると、例 3 では Both the Liberal Party and myself; and we are quite different; So I believe we have already; 例 5 では Our Party, the Liberal Party as well as myself; and we have already asked; I have already expressed と、ともに主語を 3 度繰り返す構文となっている。また「あらゆる政策について」の処理を見ると、例 2 では is different concerning policies; concerning policies; 例 5 では all kinds of policies; concerning each of the policies と重複が目立つ構文となっている。

SL の語順を踏襲するのは同時通訳ではやむをえないことが多いが、時間的余裕のある逐次通訳では、SL の語順にこだわることなく TL として自然な文章になるような文構造を選ぶべきであろう。このことは、TL 表現の “clarity” を高める観点から大切なことと思われる。「自民党をはじめ他の政党と違いました」(③) を抜かしてはいるが、Subject 1 の総合評価が高かったことは、この点を反映していると考えられる。

<Speech 4>

この SL テキストは、音声上ではひとつのセンテンスのようにみられるが、実際には 3 つ (①+②, ③+④, ⑤) あるいは 4 つ (①, , +④, ⑤) のセンテンスから成ると考えるのが適切であろう。TL 資料においても 7 例のすべてがこのようにセンテンスを区切っている。この SL セグメントでは、ユニット① (特に「ツケ」のコンセプト) と⑤が曖昧性を含んでいて工夫を要する。TL では 7 例中 4 例が “price” に直接言及せず (3, 5, 6, 7)、2 例 (3, 6) が⑤「それだけでは駄目だと」を完全に抜かして

いる。SL 表現が明瞭さを欠いていることが、分析対象者の多くに戸惑いと、ある種の混乱をもたらしたものと考えられる (3, 4, 5, 6, 7)。また、7 を除く 6 例が SL と同じ , , , という文構成の順序を TL でも使っている。

VII. 結論

1. この研究は日本語・英語間の逐次通訳の中でも、多くの通訳者にとって第 2 言語 (L2) である英語を TL とした、日本語から英語への通訳を対象としている。研究の第 1 の焦点は、母国語に比べ表現力の点で限界のある L2 への通訳がどのように行われ、より良い TL の表現を得るため通訳者がどのような工夫をしているか、さらには表現力の不足を克服するためにどのような戦略が効果的かを知ることにあつた。

まず、35 名の通訳者および通訳訓練生の 4 つのスピーチに対する通訳パフォーマンスを転書した TL テキストを 6 名の専門家によって評価してもらった。評価者の方々に心からお礼を申しあげる。評価の結果は、III. 3 で述べたように、かなりの評価者間差異を示し、評価についてのいくつかの潜在的な問題点を提示した。通訳の評価はそれ自体多くの要素を含んだ重要な分野であるが、この研究においてはこれ以上深くは立ち入らなかった。今後、研究者によって取り上げられるべき重要な分野のひとつだと思ふ。

続いて、通訳の質に影響を及ぼす諸要因を選び、上記の評価結果と対照して分析したが、定量的要因については、I および IV で述べたように評価結果との関連性はほとんど見られなかった。このことは、通訳における TL テキストの評価においては客観的・定量的パラメータによる分析はあまり有効ではないということを示すと思われる。この研究での定量的パラメータの選択は必ずしも適切ではなかったであろうが、これら以外に有効なパラメータを見つけることも困難ではないだろうか。通訳の質の評価における客観性の確保は違った角度から試みられるべきだと考える。

2. 上記の定量的指標による分析に対し、V および VI では語彙の使用や構文の選択といった定性的かつ具体的な要素による分析を Appendix 3, 4 において試みた。Appendix 3 が示すように、日本語の語句表現に対して通訳者によって多種多様な英語表現が見られる。たとえば、「(新産業を) 育てる」(Speech 1) のような単純な語に対して、7 名で 6 種類の英語動詞が使われている。このような表現の多様性は、「給与水準」「矛盾」「公害問題」「要点」のような名詞表現 (nominal entities) とは対照的に、多くの動詞表現について見られることは興味深い。

また、V で指摘したように、第 2 言語への表現であることを反映して不適切な英語表現が比較的多く見られた。通訳者は語彙力を拡大するよう努力を続けるのは当然であるが、特に慣用的な日本語表現については日ごろからその適切な英語表現を見つけ、“store” しておくことが望ましい。

統語的選択において分析対象者に共通して見られるのは、まず SL の語順をそのま

ま踏襲する傾向である。これは、VIで指摘したようにしばしばTLの構文における重複と混乱の原因となる。

次は、日本語では英語のようなS+V+Oといった統語構造がはっきりしていないことに対する対応である。これは、<Speech 1>の「空洞化現象は…当然出てくる」、<Speech 3>の「自由党とそして私自身も…世に問うております」で見られるように、“topic-prominent language”といわれる日本語の特徴に注目して、topic（あるいはtheme）とcomment（あるいはrheme）の関係として捉えて処理するのがひとつの方法であろう。

もうひとつは<Speech 4>にみられるような、いわゆる「曖昧な」日本語表現に対する対応である。これについては、通訳者は自身の判断によって話し手の意図を確定し、それを明瞭な英語に表現することが適切だろうと思われる。曖昧な日本語を曖昧な英語に訳すことはきわめて難しい。

3. 以上、第2言語への通訳という観点から、日本語から英語への逐次通訳をいくつかの角度から分析した。研究の結果は、第2言語であるがゆえのTL表現のさまざまな問題点を示していると思う。このような第2言語能力の限界を短期間で克服ことは不可能であろう。しかしながら、通訳者は適切な注意力を払い、そして通訳技術を高めることにより、表現力の不足をカバーし、信頼性のあるTL表現を得ることに努めるべきであり、そしてそのことは可能であろうと考える。

日本語を母国語とし、英語を第2言語とする通訳者が今後も多数を占めるであろうわが国通訳界の現状を考えると、きわめて不十分な試論ではあるが、このペーパーが日本語と英語との間の通訳に関する理解を深め、その質を高める上で一助となることを希望するものである。

注：本研究は明海大学大学院応用言語学研究科2000年度宮田研究助成金の給付により可能となったものである。

筆者紹介：小松達也 (KOMATSU Tatsuya) 明海大学外国語学部教授。1960年から66年の間、米国国務省 Language Services Division 勤務。その後サイマル・インターナショナル創設に参加し、1987年から97年まで同社社長を勤める。この間、数多くのG8サミット、APECなど国際会議で会議通訳者として活躍。E-mail: <tkomatsu@cronos.ocn.ne.jp>

【参考文献】

- AIIC (1997). *AIIC Directory*. International Association of Conference Interpreters.
Barik, H. (1971). A Description of Various Types of Omissions, Additions and Errors of

Translation Encountered in Simultaneous Interpretation. In S. Lambert & B. Moser-Mercer (eds.), *Bridging the Gap: Empirical research in simultaneous interpretation*, 121-137. John Benjamins.

Campbell, S. (1998). *Translation into the Second Language*. Longman.

Gile, D. (1995). Fidelity Assessment in Consecutive Interpretation: An Experiment. *Target* 7: 1, 151-164. John Benjamins

Gile, D. (1999). Variability in the Perception of Fidelity in Simultaneous Interpretation. *Journal of Linguistics* No.22, 51-79. Hermes.

Seleskovitch, D. (1978) *Interpreting for International Conferences*. Pen and Booth

Seleskovitch, D. & M. Lederer (1989). *A Systematic Approach to Teaching Interpretation*. The Registry of Interpreters for the Deaf.

池上嘉彦 (2000) 『日本語論への招待』 講談社

福井治弘・浅野輔 (1961) 『英語通訳の実際』 研究社

国弘正雄・西山千・金山宣夫 (1969) 『通訳：英会話から同時通訳まで』 日本放送出版協会

西山千 (1979) 『通訳術と私』 プレジデント社

APPENDIX 1 SL Material (SL 資料)

Speech 1:

「日本型経営と雇用創造」東北大学学長 西沢潤一氏講演 (1994年5月21日)

“Japanese-Style Management and Job Creation.” Junichi Nishizawa, President, Tohoku University. Delivered on May 21, 1994 in Tokyo.

「…さきほど、ロビンソンさんからも出ておったように思いますし、また今、高岳先生からお話がありました、いわゆる空洞化現象というのは、これは当然出てくるわけございまして、簡単に言えば、日本の給与水準が高いですね。なんだか、まだ日本民族は働き過ぎなんていう言葉が通用しているのですが、どうも私はそんなことがどうしてつながっているのだろうと、ずいぶん働かなくなったのに、という気を持っているわけでありまして、働かなくなった人が高い給与を貰っていれば、これはどこかに矛盾がいくに決まっているわけでありまして、当然これが空洞化につながってくる。だから私は前から新産業を育てなければならぬと、外国で作っていないものを作ってどんどん輸出した時に貿易摩擦が起こるかという、これはほとんど出ないと私は思います」 (57”)

Speech 2 :

「地球環境問題に対する日米企業の役割」東京大学教授 茅陽一氏講演 (1992年7月12日)

“The Role of the U.S. and Japanese Companies Regarding Global Environment.” Yoichi Kaya, Professor, Tokyo University. Delivered on July 12, 1992, in Tokyo.

「…この点だけひとつ最初に申しあげてみたいと思いますが、それはどういう意味かと申しますと、われわれが例えば温暖化といった問題について知っている知識は、たしかに従来の公害問題などに比べますと、少ないことは事実でございます。地球の温度上昇ということひとつをとってみましても、現在でもいまだに 1940 年代から 70 年に至る温度の下降というものを説明できておりません」(33”)

Speech 3 :

「総選挙と自由党」自由党 小沢一郎氏講演（2000 年 6 月 7 日）

“The Coming General Election and the Liberal Party.” Ichiro Ozawa, President, the Liberal Party. Delivered on June 7, 2000, in Tokyo.

「…自由党とそしてまた私自身も、あらゆる政策について、自民党をはじめ他の政党と違いまして、明確な結論をすでに世に問うておりますので、それを重ねて申しあげる必要はないと思いますので、簡単に要点のみを申しあげます。政策論レベルの話の前に、やはり指摘しておかなければならないことは、ただいまの森政権、森自公政権についてでございます」(56”)

Speech 4 :

「21 世紀・環境ともの作りとの共生について」松下電子工業(株) 常務取締役 森和弘氏講演（2000 年 4 月 7 日）

“Harmonizing Environment and Manufacturing in the 21st Century.” Kazuhiro Mori, Managing Director, Matsushita Electronic Industries. Delivered on April 7, 2000, in Tokyo.

「…先ほどのような、われわれ大量に生産したツケというのですか、ある面では文化の進展に貢献したとも言えるんですけども、一面そういった大量生産、大量販売、大量廃棄につながるようなことが、環境破壊ということにつながってきて、それだけでは駄目だと、これからは使った製品を回収して、そして解体し、分別して再資源化すると、こういうふうにしなれば駄目だと、これまでの工場、われわれこれまでのもの作りというのは一般的な工場、これからは逆工場と、こういったことをしていかなければならないと、こういう認識に立ってるわけでございますけれども、ここでいろいろ課題もでございます」(64”)

APPENDIX 2 Individual Assessments

Top Row: Fidelity Score
Center Row: TL Quality Score
Bottom Row: Total Score

Speech 4

Subjects	A	B	C	D	E	F	Av.	Rank
1	5	5	3	4	4	4	4.17	1
	4	5	3	4	4	3	3.83	1
	9	10	6	8	8	7	8	1
2	4	3	4	3	3	5	3.67	2
	2	4	4	3	3	3	3.17	2
	6	7	8	6	6	8	6.8	2
3	4	5	3	3	3	4	3.67	2
	3.5	4	2	4	3	2	3.08	3
	7.5	9	5	7	6	6	6.7	3
4	2	3	3.5	3	3	5	3.25	4
	3	4	4	2	2	3	3	5
	5	7	7.5	5	5	8	6.3	4
5	3	3	3	3	2.5	3	2.9	7
	2.5	4	3	3	3	3	3.08	3
	5.5	7	6	6	5.5	6	6	5
6	4	2	3	3	2	5	3.17	5
	2.5	3	2	3	2	4	2.75	6
	6.5	5	5	6	4	9	5.9	6
7	3	3	3	2	3	4	3	6
	3	3	4	2	2.5	2	2.75	6
	6	6	7	4	5.5	6	5.8	7

Note 1: Extreme left column shows subjects ranked on the basis of the average of the total score.

Note 2: Alphabets in the top row show assessors.

Note 3: Assessment was made in scores of 5 (excellent) to 1 (poor).

APPENDIX 3 : Lexical Choices (1/3)

Speech 1

Subjects	当然 (でてくる)	給与水準	(言葉が) 通用している	(どうして) つながっている	矛盾	(新産業を) 育てる
1	(is) a natural course of event	the salary level	it is still said that ~	(I personally doubt that)	a contradiction	nurture
2	<i>m</i>	the (high) level of (~) salary	many people say that ~	(I wonder if it's true)	<i>m</i>	develop
3	will (happen)	level of salary	people say that ~	(these two things) are happening together	<i>m</i>	develop
4	(will be) a natural consequence	The salary level	are called (to be ~)	(whether this is true)	a contradiction	foster
5a	(is) kind of natural (to have)	the (high) level of (~) salary standard	<i>m</i>	there is a connection between	this contradiction	create
5b	(is) only natural	The (Japanese) pay scale	(Japanese people are often criticized as being ~)	(I don't think we are ~)	a contradiction	generate
7	(is) one of the natural consequences	the level of salaries	some people said that ~	(wonder) if this second statement is said	contradiction	raise up

Note 1: Words in paren are expressions not directly translated but related in terms of context.

Note 2: *m* means corresponding TL expressions missing.

APPENDIX 3 : Lexical Choices (2/3)

Speech 2

Subjects	(従来の) 公害問題	(知識は) 少ない	1940年代から 70年に至る	温度の下降
1	some other environmental problems	not have enough (knowledge) compared to	from 1940's to 1970's	decline in the climate
2	the conventional environmental issues	(our knowledge) is much less than	from 1940's up to 70's	the temperature change
3	industrial pollutions	have less (knowledge) than	during the period of 1940's to 1970's	(why) the temperature declined
4a	the pollutoions	have much less (knowledge) compared to	from 1940 to 1970	the decrease of temperature
4b	pollution	(our knowldege) is less than	from 1940's through 1970's	the temperature increase
6	the conventional type of pollution	(the knowledge) is much smaller than	from 1940's to 1970's	the temperature change
7	pollution	have less (knowledge) than	between 1940's to 1970's	this kind of transition

Note 1: Words in paren are expressions not directly translated but related in terms of context.

APPENDIX 3 : Lexical Choices (3/3)

Speech 3

Subjects	(～とは) 違いまして	明確な結論	世に問う (ております)	重ねて (申し上げる)	要点	森自公政権
1	m	clear policies and conclusions	have (long) established	go through	(a few of) the main points	the L-D's-Komeito coalition
2	different from	a clear conclusion	Have presented to the world	repeat	the main points	the coalition government led by the LDP and the K Party
3	quite different from	our clear results and our conclusions	have (already) put to the world	repeat	the major issues	the tie-up between LDP and the K Party
4	different from	Our conclusion in a quite clear fashion	have presented to the Japanese society	repeat	the main points	The present government of Prime Minister Mori
5	different from	clear conclusions	have (already) asked all the other people	repeat	very main topics	tripartite coalition led by Mr. Mori
6a	unlike	clear announcement on our attitude	have made (clear) announcement	repeat myself (in giving you information)	to summarize (as briefly)	Mori's coalition government
6b	unlike	(a public announcement)	made a public announcement	reiterate	(to keep) my points brief	Mori Administration

Note 1: Words in paren are expressions not directly translated but related in terms of context.

Note 2: m means corresponding TL expressions missing.

Note 3: L-D's shows Liberal-Democrats, LDP Liberal Democratic Party, K Komei.

APPENDIX 4: Syntactic Choices

<Speech 1>

I. SL Segment

「…さきほど、ロビンソンさんからも出ておったように思いますし、また今、高岳先生から
(-①-
お話がありました、いわゆる空洞化現象というのは、これは当然出てくるわけでございまして、
) (-②-) (-③-)
簡単に言えば、日本の給与水準が高いですね」
(-④-)

II. Corresponding TL Segments (1-7 = Subject Numbers; -n = Segment Numbers)

1. As was cited by Mr. Robinson and Dr. Takaoka,
it is a natural course of event
that a hollowing-out phenomena will appear.
And in Japan the salary level is still high, . . .
2. As Dr. Robinson and Prof. Takaoka were saying earlier,
I would like to touch on the so-called hollowing-out phenomena.
(missing)
To simply put it, one thing we have to mention is the high level of the
Japanese people's salary.
3. I believe Dr. Robinson and Dr. Takaoka both mentioned
hollowing-out phenomena.
I think it will happen.
By the way, many people talk about high level of salary in Japan, --
4. As was mentioned by Prof. Robinson and Mr. Takaoka,
the hollowing-out of the industries
will be a natural consequence.
In Japan, the salary level is said to be very high, . . .
- 5a. Well, Dr. Robinson has already mentioned and right now Mr. Takaoka has
given presentation,
but there is this phenomenon of the hollowing-out of Japanese industry
and I believe it's kind of natural to have this phenomenon.
To simply explain, there is a connection between the high level of Japanese
salary standard (and people working too hard.)
- 5b. As Dr. Robinson suggested and as Dr. Takaoka also has just mentioned,
this phenomenon called hollowing-out of the Japanese industry,
this is only natural.
To put it simply, as the Japanese pay scale has remained high, . . .

7. So as Dr. Robinson as well as Dr. Takaoka have rightly pointed out, hollowing-out of the Japanese economy is one of the natural consequences in this context.
- To put it simply, I would like to say the following; it is still said that in Japan the level of salaries is still quite high, . . .

<Speech 3>

I. SL Segment

「…自由党とそして私自身も、あらゆる政策について、自民党をはじめ他の政党と違いまして、
 (-①-) (-②-) (-③-)
明確な結論をすでに世に問うておりますので、それを重ねて申し上げる必要はないと思います」
 (-④-) (-⑤-)

II. Corresponding TL Segments (1-7 = Subject Numbers; -n = Segment Numbers)

1. (missing)
The Liberal Party and, in fact, I myself
have long established
clear policies and conclusions
 which, I believe, you are all familiar with and which there is no need to go through today.
2. The Liberal Party as well as myself
 is different () concerning policies from any other parties including LDP or any other parties.
 That is that I have already presented a clear conclusion to the world concerning policies.
 So I would not want to repeat my statement here.
3. Both the Liberal Party and myself
 have come up with
 various policies,
 and we are quite different from the Liberal Democratic Party and other parties.
 ' So I believe we have already put to the world
 ' our clear results and our conclusion.
 So I don't think I need to repeat these here.
4. The Liberal Party as well as myself,
 regarding any policy matters,
have already presented our conclusions in a quite clear fashion to the
Japanese society,
 which is different from LDP or other parties.

contributed to the destruction of the environment.

So the conventional system is no more viable. That's what we have come to recognize.

2. So now we are paying the price for manufacturing trivial things.
This in a sense did contribute to the development of our culture.
However, this mass production, mass sales and mass disposal led to the environmental collapse.
This cannot keep -- this cannot continue.
3. In the past, we engaged in mass production. (*price; missing*)
And of course this mass production benefited to our society, for instance, developing our culture to a certain extent.
But also this mass production, mass consumption, mass destruction causes a negative effect such as destruction of the environment.
(*missing*)
4. Now we have to pay the prices of the mass production that we've been conducting until now.
On the other hand, we might have been contributed to the progress of the culture.
But at the same time we've been engaging in mass production, mass selling and that ended up in the mass destruction.
But we cannot continue to go with that approach, and that approach itself is not viable any longer.
5. However, because of this mass production the world is facing some problems.
In one aspect, we can see that this mass production has been contributing to the development of culture.
But on the other hand, this mass production or mass sales or mass disposal has brought about the destruction of the environment.
So this cannot be - - - this type of production cannot be continued today.
6. So as I said, as a result of the mass production I mentioned earlier,
(*price; missing*)
that did contribute to the cultural development in one sense.
However, on the other side, this mass production or mass selling of the product did lead to the destruction of the environment.
(*missing*)
7. We have continued to run mass production, mass sales and mass disposal.
And this cycle has brought about the destruction of the environment.
So we did sacrifice the environment
while we were contributing to the advancement of a culture.
We cannot continue this one way method.